

## 古松の心を探る

——嵯峨天皇御製「代神泉古松傷衰歌」における「幽志」の意義を考察する

リーブズ クリストファー

Searching the Heart of an Ancient Pine: Examining the Meaning of “Longing after the Elusive” (*yūshi*) in Emperor Saga’s “A Song Composed on Behalf of an Ancient Pine in the Shinsen Gardens, Lamenting the Waning Vigor of that Tree”

Kristopher REEVES

### Abstract

*Bunka shūreishū* (Anthology of Splendid Literary Flowerings, 818), one of three imperially commissioned anthologies of Sinitic letters compiled during the early ninth century, contains a poem by Emperor Saga (786-842, reigned 809-823) entitled “A Song Composed on Behalf of an Ancient Pine in the Shinsen Gardens, Lamenting the Waning Vigor of that Tree.” While the overall content of this poem is not especially difficult, the final couplet, in which we find a description of the pine tree’s own sentiments, contains the expression *yūshi*, which might be rendered into English as something like “longing for the elusive.” This expression, being very rare in the world of Sinitic literature, presents us with some difficulty when trying to reach an accurate interpretation of the entire poem. Kojima Noriyuki (1913-1998), the first scholar to present us with an annotated edition of *Bunka shūreishū*, understands *yūshi* to mean “profound sentiments.” On the other hand, English-language scholars like James Webb, as well as Judith Rabinovitch and Timothy Bradstock, in their respective translations of this same poem, interpret the expression to mean “secret intention” or “secret desires.” We are thus presented with two opposite interpretations of the pine’s sentiments: According to Kojima, the expression *yūshi* points to a positive and hence desirable trait, while, according to Webb, Rabinovitch, and Bradstock, the expression signifies a negative, even potentially subversive, frame of mind.

The present paper, by examining examples of the expression *yūshi*—as well as two synonymous expressions, *yūjō* and *yūhai*—as found in continental poetry of the early Tang Dynasty, seeks to present an accurate interpretation of the expression *yūshi* within the context of Emperor Saga’s poem. I propose that the term *yūshi* ought to be understood in a positive sense as referring, quite specifically, to a sincere longing for the life of reclusion enjoyed by the ancient pine when, before being transplanted into the imperial garden, it dwelt in tranquility and freedom in woods undisturbed by the madding crowd. Moreover, I argue that the narrator of this poem, opposed to what previous scholars have suggested, is expressly not Emperor Saga, but the ancient pine itself.

### 一、序文——詩人が松に擬える

弘仁九年（818）に編纂された『文華秀麗集』という勅撰漢詩集に嵯峨天皇（786-842）の詩作が多く載せられている。古い松の衰えている姿を哀れむ「代神泉古松傷衰歌」——神泉（しんぜい）の古松（こしょう）に代わりて衰（おとろ）へしを傷む歌（第120首）——と題する詩がその一例である。本論では専らこの詩に注目し、先行研究を踏まえながら新たな解釈を試みる。なお先行研究と言っても、本詩の解釈・翻訳は管見の限り次の三点にとどまる。

- ① 1964年に岩波書店から出版された小島憲之校注の『懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹』（日本古典文学大系 69）の第291-292頁に見える小島氏の本詩に対する簡略な解釈と頭注に織り込んでいる現代語訳。
- ② 2005年に提出されたJason Webb氏の博論（Princeton大学）である“*In Good Order: Poetry, Reception, and Authority in the Nara and early Heian Courts*”の第168-173頁に見える英訳とやや細かい解説。
- ③ 2019年にBrillから出版されたJudith Rabinovitch & Timothy Bradstock両氏の*No Moonlight in My Cup: Sinitic Poetry (Kanshi) from the Japanese Court, Eighth to the Twelfth Centuries*の第173頁に収録されている本詩の英訳。

WebbおよびRabinovitch & Bradstock両氏は小島氏の解釈および現代語訳を参考しながらも少し異なった理解を示しており、嵯峨天皇の詩作を改めて考察するきっかけとなる。

まずは詩題中に見える「代」は訓読の常例に従い「代わりに」と読み慣れているが、ここは〈松の気持ちに擬（なぞら）えて〉或いは〈松になったつもりで〉の意味で、嵯峨天皇が松の立場からその心情を明かした作品である。天皇は内裏にあった神泉苑（しんせんえん、古くは「しんぜいえん」）の松を眺めるために、わざわざ水辺に亭（あずまや）を建てた。その木を眺め続けるうちに、ある日ふと、老木が衰えてきたことに気づく。昔は悠々と伸びていた枝はいつのまにか縮み曲がってしまい、以前は厳冬になっても雪に映えながら美しく輝く緑色の針葉は今となってひどく褪せている。まるで生気を失ったかのようなようである。風や霜を凌ぎいつまでも色が褪せないのが松の天性であると言われるが、天皇が平素より大事にしてきたこの一本の松は、何故かその天性に背（そむ）いて色を失いつつある。この変化は一体どういうわけであろう。「代神泉古松傷衰歌」は衰える老松の気持ちを汲み、目に見えぬ松の心を臣下にほのめかそうとする詩作である。何年何月に、いかなる場で詠まれた作品かは詳（つまび）らかでなく、そして神泉苑に実際にあった松なのか、それとも想像上の松を詠んでいるのか、これもまた定（さだ）かでない。少なくとも嵯峨天皇勅撰の『日本後紀』（819年勅命で841年完成）にはこの松に関する記事は見当たらない。

まずは「代神泉古松傷衰歌」の原文、訓読および現代語訳を仮に記す。論を進めるにつれては、訓読を見直すところがあり、その箇所にあたる現代語訳も訂正する必要があるが生じるが、当面は小島憲之（こじまのりゆき 1913-1998）の施した読み下しと頭注に見える現代語訳を少しばかり変えながら次の通りに示す<sup>(1)</sup>。

- |   |                    |   |
|---|--------------------|---|
| 1 | 昔従凡木殖上林<br>過却風霜年幾深 | 昔（むかし）は凡木（ぼんぼく）を上林（じょうりん）に殖えし従（よ）り、風霜（ふうそう）を過却（かきやく）し 年幾（いく）ばくか深き。        |
| 2 | 帝者愛貞賜恩顧<br>水亭忽構頻近臨 | 帝者（みかど）は貞（みさお）を愛（め）で 恩顧を賜（たま）い、水亭（すいてい）忽（たちま）ちに構え 頻（しき）りに近臨（きんりん）したまう。    |
| 3 | 本森沉 今顛顛<br>長條縮折乏蒼翠 | 本（もと）は森沈（しんちん）なれど 今は顛顛（しょうすい）す。長条（ちょうじょう）は縮折（しゅくせつ）して 蒼翠（そうすい）に乏（とも）し。    |
| 4 | 不是辭榮好寂寞<br>還愁稟質抱幽志 | 是（こ）れ榮（えい）を辭（さ）り寂寞（せきばく）を好むにあらず。還（かえ）りて、愁（うれ）う 稟質（ひんしつ）幽志（ゆうし）を抱（いだ）くことを。 |

昔に普通一般の木々を禁苑（きんえん）に植えた時代から、  
風や霜を凌いで年月ははなはだ久しいこと。

天子である自分は松の貞節（色が変わらない特質）を愛し御恵みを垂れ給い、  
御苑の水辺に亭（あずまや）をゆくりなくも建て頻りに松のそばにお出でになる。

以前はこんもりと茂っていたが、今となっては古木となって衰えている。

(1) 小島憲之校注『懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹』（日本古典文学大系 69 東京：岩波書店 1964）第291-292頁を参照。漢詩の原文の漢字は旧字体のままにする一方、訓読の漢字と仮名遣いを現代通行の字体と仮名遣いに改めた。

さし出た長い松の枝は折れ縮んで青緑の色は少ない。

このような状態は別に栄誉を辞退して寂寞を好むわけではなく、

反対に松が生まれつきが奥深いところざしを持っていることを憂いているのだ。

小島氏は現代語訳において第二聯の冒頭の「帝者」を〈天子である自分〉と訳しているが、本作品は嵯峨天皇本人の立場からというよりは、自分が松になったつもりで詠んだものと理解した方が適切である。ここは〈天子である自分〉ではなく、〈老木である自分を大事にしてきた天子〉と主眼を松に移し、「帝者」に向かって詠んでいるものと理解したい。小島氏の頭注に言及しているように、「代何々」という詩題は『玉台新詠』（ぎょくたいしんえい）に見られ、六朝時代からすでに成立していた詠いぶりだった。多くの例は閨怨詩（けいえんし）であり、防人（さきもり）として赴いている夫と別れた婦人が、ひとり寝の寂しさを嘆く。これらの詩において作者は、婦人を第三者として詠むのではなく、婦人の視点から嘆かわしい心情を訴える。嵯峨天皇とほぼ同時代の唐土の施肩吾（しけんご Shi Jianwu, 780-861）は「代征婦怨」——僻地に赴いた夫と別れた婦人に代わりてその怨みを詠う（『全唐詩』15: 494）——という詩に次の句を残している。「何事不看霜雪裏 堅貞惟有古松枝」——霜や雪に覆われた景色を遠くまで見渡せば、ほとんど何も見えないが、古い松の枝だけは相変わらず堅強（けんきょう）にして針葉の色は少しも褪せることなく雪に映えて輝いている。松の貞節つまり色の変わらぬことは婦人の夫への忠実さを暗喩している。作者は婦人になったつもりでそのところを訴えている。嵯峨天皇もまた古い松になったつもりで木の気持ちを表そうとしている。施肩吾が婦人に擬えているように、嵯峨天皇も「古松」という風物になりすましてその心中の悩みを詠んでいる。繰り返しにはなるが、嵯峨天皇の「代神泉古松傷衰歌」は施肩吾の「代征婦怨」と同じく、詩人本人ではなく他のもの（松や婦人）の立場から詠っていることは間違いなからう。

## 二、松が「顛顛」（しょうすい）する

松の前に佇（たたず）まいその衰えぬ色を深く愛でる詩は数多く存在している。しかし、松に擬えてその心情を内から明かす詩作は、中国や日本においてその例を探してもほとんど見当たらない。嵯峨天皇の「代神泉古松傷衰歌」に謹んで和（こた）えた仲雄王（なかおおう 生没年未詳）の「奉和代神泉古松傷衰歌」が唯一の例だろう。嵯峨天皇が施肩吾の「代征婦怨」のような詩作に想を得て、人間である婦人から視野を広げ植物の松までも擬えて詠う新しい詠いぶりを作り出した、と結論するのは尚早である。嵯峨天皇は先例となる何等かの作品を踏まえながら詠っているに違いない。「代神泉古松傷衰歌」は松が衰えることに注目し、その貧相な姿を「顛顛」（しょうすい）という言葉で描写している。この「顛顛」は「憔悴」の古い字体であり、心中に憂いを抱き顔がげっそりと疲れ果てる様子や、病（やまい）に長く患い体がやせ衰えていることを意味する言葉である。『文選』（もんぜん）はもっぱら「顛顛」と書くのに対して、唐朝以降は「憔悴」が主流となる。

『文選』にしても唐詩の世界にしても、「顛顛・憔悴」は人間の顔やその雰囲気形容するものとして使われ、松の衰えている様子を「顛顛・憔悴」で形容するものはほぼ皆無である。ただひとつ、嵯峨天皇と同時代の劉禹錫（りゅううしゃく Liu Yuxi, 772-842）の「廟庭偃松詩 并序」——屋敷の庭園にある倒れそうなほどに伏し曲がっている松に関する詩、ならびに序文——（『全唐詩』11: 359）に松の貧相な姿を描写するのに「憔悴」を用いている。たいへん珍しい例である。嵯峨天皇が劉禹錫の詩文を読んで自分の詩作に織り込んでいる跡はところどころ発見できる。例えば、御製の「河陽十詠」（『文華秀麗集』第96首）の題および詩の形態や内容も明らかに劉禹錫の「海陽十詠」（『全唐詩』11: 355）の影響を受けている<sup>(2)</sup>。そして、劉禹錫と白居易の間に交わされた詩を集録した『劉白唱和集』も『日本国見在書目録』（891年成）の「別集家」の部分に載っている。嵯峨天皇が劉禹錫の「廟庭偃松詩」を目にした可能性は高い<sup>(3)</sup>。

(2) 小島（1964）第276頁。「十詠」という詩形に関しては後藤昭雄「嵯峨朝における新樂府受容をめぐって」（『成城国文学』[2016.3] 32号）第7-8頁を参照。肖瑞峰の「略论刘禹锡对中日诗坛的影响」（『浙江社会科学』[1995第5期]）にも論及している。

(3) 橘英範の「劉白聯句訳注稿（十五）」（『岡山大学文学部紀要』[2012 58巻]）第113-112頁に「廟庭偃松詩」に触れる。

「廟庭偃松詩」の序文によると、劉禹錫と交際していた裴度（はいど Pei Du, 765-839）の庭に一本の小松があった。裴度はこの松の枝や根の形が竜または蛇のように蛇行しながら伸びているのをたいそう美しいものとして、その松を愛でる詩を作った。しかしながら、この松はどうやら屋敷の高い檐（ひさし）と聳え立つ木々の間に植えられ、上からも左右からも押さえられているために、中々自然に伸びる事はできず、倒れかかりそうになっていた。裴度は松の根を固めるために土を盛り、これ以上に木が歪まないよう幹に幾つかの縄を結んで四方に引っ張った。裴度の仁愛に反応してか、松の木は生氣を取り戻した。甦った枝や根はふたたび竜や蛇のようにそのあたりを蜿蜒（えんえん）と伸びだして、松は古くなるにつれて一層珍しい形を呈するようになった。後日、劉禹錫が裴度の屋敷に訪れた際、松の木を眺めながらその話を聞いて、自らもその古松の珍しい形を詩で詠んでみた。詩は次の通りである。なお、紙幅の制限により訓読の代わりにやや訓読めいた現代語訳を付す。

- |   |                    |  |
|---|--------------------|--|
| 1 | 勢軋枝偏根已危<br>高情一見與扶持 | 古松の勢（かたち）はひどく軋（まが）りこみ、枝はすべて偏（かたむ）いていれば、地面を這う根も危うい状態だった。これに気付いた裴度は哀れみ深い高尚な情（こころ）をもって、苦しんでいる松をなんとか助けてやろうと決心した。   |
| 2 | 忽從憔悴有生意<br>却為離披無俗姿 | その御蔭で、いままで憔悴（くるし）み悴（おとろ）えていた松は忽（たちま）ちに生氣を取り戻しだした。松は改めて離（さか）んに披（しげ）ろうと奮い立ち、萎（しお）れた姿が生命力に溢れるものになった。              |
| 3 | 影入巖廊行樂處<br>韻含天籟宿齋時 | 今となつては、貴人たちが巖（いわお）のごとき高い宮殿で宴を楽しんでいるその宮殿にまで、松の長い影が届く。祭事前に齋戒を守っている神職の齋宮までに、松の枝を吹き渡る風の中に響く風雨の音や鳥の囀りが聞こえる。         |
| 4 | 謝公莫道東山去<br>待取陰成滿鳳池 | 謝安（殊謝東山 320-385）様よ、「やはり人里から遠く離れている東方の山に隠居しびゆこう」と言わないでくれ。むしろ、この松の陰（かげ）が宮廷にある鳳池の水面をすべて覆うように成（な）るまでゆっくりお住みになりなさい。 |

第七・八句（尾聯）の意味については注(3)の橘英範の論文に委ねるが、簡単に言えば、劉禹錫は裴度にこう言っている。「裴度さん、こんなに立派なお屋敷にお住まいになり、しかもこれほど珍しい松があるのなら、このまま隠居しなくてもよいのではないですか。都心から遠く離れた深山や人気（ひとけ）のない隠れ里まで行き、世間を捨てる必要はまったくありませんよ」。詩人は古松に注目して、裴度の屋敷が優雅かつ静寂な住処であることを褒め称（たた）えている。人里からさほど離れていなくても、この静かな屋敷にいてだけで、十分に遁世している気持ちになる。そして、その遁世めいた非日常的な雰囲気醸すのに、古松が担っている役割は大きい。

嵯峨天皇の詩と関りがありそうな第一・二句（首聯）および第三・四句（頷聯）に注目しよう。松の木は本来ならば高い山や深い谷間など人気（ひとけ）の少ない幽遠なところで伸び伸びと大きくなるものである。松はそういったところで凄まじい暴風雨に堪え、積もり積もった雪や霜を凌ぎ、緑色の針葉を失わない永遠に衰えることのない木である。それなのに、裴度の屋敷に植えてある松はなぜか衰えていた。その原因は詩の序文に詳しく書いてあるように、裴度が当初その松を植えたところは高い庇（ひさし）や聳える木々の間という狭苦しい場所であったためである。劉禹錫は序でこの状態を「似不得天和者」——松はどうやら自然に成長することができないようだった——と推測している。「天和」（てんわ）とは、天地万物のなりゆき、つまり自然界におけるそれぞれのものにもっとも適した環境をいう。同じ序文に「物性」（ぶっせい）という言葉が見える。これもまた、万物はそれぞれの本性を持ち、運よく本性に適した環境にめぐり合わせれば盛んになり、そうでなければ衰えると「天和」の理（ことわり）を強調している。裴度の松は当初、その本性に合う環境に恵まれず「天和」を受けることなく次第に衰えていった。山や谷に移植するのを惜しく思ったのか、裴度は間に合わせのため、根元に土を盛ったり幹に縄を縛ったりして、その成長をいわば「人工的に」助けた。

適切な環境を与えられた松は、憔悴した様子をすっかり変え、「生意」（せいい）——改めて伸びようとする意識や兆し——を見せた。かつての「俗姿」（ぞくし）の影はもう見えなくなった。この「俗姿」はほとんど見ない漢語で、『文選』に例がなく、『全唐詩』や『全唐文』にそれぞれに一例ずつしかない。きわめて珍しい表現であるので、具体的な意味も把握しがたい。文脈から察すれば、〈疲れ果てた、気がなく、ひどく衰えていた姿〉をさしているのであろう。劉禹錫には「崔暉大尚書及諸閣老宴杏園」——崔大（さいだい Cui Da 生没年未詳）尚書（長官）と中書省の舎人たち（部下）に従え杏園（こうえん）にて宴会に陪席する——（『全唐詩』11: 365）という次の七言絶句がある。

- |   |                    |  |
|---|--------------------|--|
| 1 | 更將何面上春臺<br>百事無成老又催 | 年のとった僕が今となって、この春めいた楼台に登り華やかな宴（うたげ）に参加するなんて恥ずかしい事だ。<br>これだという誇るべき業績はひとつもなく、ひたすらに年を重ねてきたばかりだよ。 |
| 2 | 唯有落花無俗態<br>不嫌憔悴滿頭來 | 珍しいことで、この杏園に散っている花だけは一般俗世間の態度をとっていない。<br>ひどく衰えているこの僕の真っ白な頭でさえ嫌わず沢山落ちてきてくれている。                |

年のとった作者の白髪を憚り嫌うことなく散ってくる春の花に感謝し愛でる詩である。「俗態」とは、一般俗世間の態度や風習を意味する。普通だと華やかなもの（春の花）は衰え朽ちるもの（白髪）を極力に避けようとするにもかかわらず、杏園の花だけは俗世間の風習にとらわれず、あえて白髪の頭を飾るようにたくさん散ってくる。劉禹錫はここに「俗態」と「憔悴」を並べさせ、〈普通であれば「俗態」に倣うものは必ず「憔悴」たるものを嫌う〉という概念を表している。「廟庭偃松詩」も確かに「俗姿」と「憔悴」を並べているが、この「俗姿」と「俗態」の意味は微妙に違う。杏園の花は俗態にとらわれない、要するに俗態を〈超越〉している。一方、裴度の甦った松は「憔悴」たるところを一新するにつれて、いままでの「俗姿」つまり衰えていた様子を〈脱皮〉した。ただし、超越といい脱皮といい、白髪が落花の彩りに染められ若返るように、裴度の松もまた「天和」つまり適切な環境を得て甦ったところは共通している。

### 三、凡木との関り

劉禹錫のこれらの詩作を読んでいたと思われる嵯峨天皇は、平安の神泉苑の古松と唐土の裴度の古松を結び付け、劉禹錫の詩に見える「憔悴」一語を取り入れたのであろう。それでは、劉禹錫の同じ詩作に見える「俗姿」や「俗態」もなんらかの形で取り入れているかどうかを検討する必要がある。嵯峨天皇の詩の冒頭に「昔從凡木殖上林」という句が見え、小島氏はこれを「昔（むかし）凡木（ぼんぼく）を上林（じょうりん）に殖えし從（よ）り」と訓読し、同氏の頭注に「昔普通一般の木々を禁苑に植えてから」と解釈している。したがって、「凡木」つまり〈平凡な木〉は詩の中心である古松を指し、古松は自分の事を謙（へりくだ）って「凡木」と自称している。「昔、このつまらない木である某（それがし）が内裏の神泉苑に植えられてから」と訳してもよからう。小島氏の訓読では、「昔從」の「從」は時間の出発点——植えた時点より、移植された日から——を意味している。Webb氏は2005年の博士論文で小島氏の解釈に倣い“*Ages ago, from the time of being planted in the royal forest*”——昔の時代に皇室の森（上林）に植えられた時期から——と訳しながら、「凡木」の語を何故か訳に入れていない<sup>(4)</sup>。その後、2019年出版の英訳日本漢詩集において、Rabinovitch & Bradstock両氏はこの冒頭句を“*Long ago, from among common trees, transplanted to Shanglin Park*”と英訳している<sup>(5)</sup>。これを試しに和訳しなおすと、「昔、平凡な木々から上林に移植されて」となる。この訳においては、原文の「從」は時間ではなく場所つまり松の出身地を言い、“*common trees*”は「凡木」を意味する。

(4) Webb, “In Good Order: Poetry, Reception, and Authority in the Nara and early Heian Courts” (PhD dissertation, Princeton University, 2005), 第168頁.

(5) Rabinovitch & Bradstock, *No Moonlight in My Cup: Sinitic Poetry (Kanshi) from the Japanese Court, Eighth to the Twelfth Centuries* (Brill, 2019), 第173頁.

小島氏は明確に示していないが、同氏の施した訓読に照らし合わせると「凡木」は松の自称になる可能性もあろう。しかしながら上述したように、小島氏は嵯峨天皇のこの詩における「帝者」を〈天子である自分〉と訳しているため、その読み方の延長で「凡木」もまた〈あの普通の木〉つまり天皇が目前にしている松を、第三者として意識する言葉になる。ただし、そう考えると天皇は古松の事を「凡木」と、やや失礼な呼び方を用いていることになる。恩顧を注ぐほどの古松を〈平凡な木〉と呼ぶのは理不尽であろう。やはり「帝者」を〈この古松である僕を大事にしてくれている天皇〉と天皇に対する松の感謝の心と解釈し、「凡木」を〈くだらない老木である僕〉と松が謙遜し自称していると理解した方が通りやすい気がする。一方、Rabinovitch & Bradstock 両氏の英訳に従えば、「従」は松の出身地を指し、松の自称ではない。松は都から遠く離れた無名な森に生まれたが、何らかの経緯により特別に選ばれて宮廷の神泉苑に移植された。つまり、松は平凡な森に生まれながらも、宮廷に迎えられるのに値する、平凡ならぬ「何か」を密かに持っていた。その素晴らしい本性を見抜いた者——遊獵の際にその森を訪れた嵯峨天皇本人か——はこの松を選んで宮廷まで移植した。松の出身地である卑しい「凡木」と天皇の所在地を代表する尊い「上林」とをよく対照させている解釈である。古松は平凡な木ではないという事を強調している結果になる。

「従」は時間の出発点を意味しているのか、それとも場所のそれを指しているのか、更に「凡木」は古松の事を指しているのか、それともその出身地を指しているのか、定説はないようである。よって、古松と「凡木」の関りも詳らかでない。嵯峨天皇が使っている「昔従」は割と珍しい表現である。唐土や日本の漢詩の先例を拾ってみる限り、ここの「従」は〈時間の出発点〉——何々時期より——を意味しているという小島説に当てはまる用例は見当たらない。曹植（そうしょく Cao Zhi, 192-232）の「求自試表」（『文選』卷三十七「表類」）に「臣昔従先武皇帝」——皇帝の忠臣である某（それがし）は昔、故武皇帝に従って——という文言が見える。ここの「昔従」は疑いなく「臣（しん）昔（むかし）先武皇帝に従（したが）い」と訓読し、「従」を「したがう」つまり従軍（じゅうぐん）すると理解すべきものである。同じく嵯峨天皇の重臣であった小野岑守（おのみねもり 778-830）の「拳和宿旧居之什」——「旧（ふる）い居（す）まいに泊まる」という詩に和（こた）えて嵯峨天皇に捧げる詩——（『文華秀麗集』第四十七首）に次の句がある。「昔従驂駕曳裾出」つまり「嵯峨天皇は昔、馬車に従い裾を地に引きずりながら出かけた」と、ここの「昔従」もやはり〈昔は何々に従い〉と理解するのが正しい。もし嵯峨天皇の冒頭句にあたる「昔従凡木殖上林」の「昔従」もこれらの用例に準じて訓読を改めると、「昔従凡木」は「昔（むかし）凡木に従い」と読み直すことができ、〈昔、古松である僕はあの平凡な木々に従って〉という新たな解釈を生み出す。しかしこの解釈を受け入れる前に、松が「凡木に従う」とはいったい如何（いか）なる行為かということを明らかにせねばならない。

まずは古松と凡木とを分け、嵯峨天皇が詠んでいる古松と平凡な木々とは根本的に違う存在だということを確認しなければならぬ。嵯峨天皇と同時代を生きた韓愈（かんゆ Han Yu, 768-824）の「芍薬歌」——シャクヤク（牡丹科の多年草）の詩歌（『全唐詩』10: 345）——に「丈人庭中開好花 更無凡木爭春華」——貴方の庭にたいそう美しい芍薬が咲いている。周りの平凡な花々はもう春の華やかさを競う相手になるまい——という対句（ついく）が見える。芍薬がもっとも華やかな花であり、それ以外の花木はすべて「凡木」と評価し、芍薬と他の花々をはっきり分けている。同じく嵯峨天皇崩御後まもなく活躍していた劉得仁（りゅうとくじん Liu Deren, 820-860）の「題新栽小松」——新たに移植した小松に関する詩——（『全唐詩』25: 884）に「滿庭蕭颯皆凡木 豈得颯颯似石溪」——風が吹き渡れば、庭いっぱいには並べてある平凡な木々はただ寂しそうに鳴るばかりだ。嚴冬の凄まじい雪や風を受けながら、巖（いわお）の間を走る山川の豪快な音を響かせる松とは、とうてい比べられないものだ——という対句がある。これもまた松と他の凡木をはっきり分けている詠いぶりの好例である。嵯峨天皇もこの詠いぶりに基づいて、古松と凡木を分けていると理解してよからう。

「昔従凡木殖上林」の意味については本論の後半に改めて考察するが、さきほど調べたところを簡単にまとめると、主人公つまりこの詩の語り手である古松は、ある日、どこかの森から他の平凡な木々と共に神泉苑へと移植された、という解釈になる。原文の「従」は〈したがう〉と読むよりは〈とともに〉あるいは〈につれて〉と読んだ方が分かりやすい。後述するように、古松はこのことについて決して喜んではいない。本性平凡ならぬこの立派な古松は平凡な木々に囲まれて苦しんでいる。

#### 四、古松の「幽志」の含意を探る

「代神泉古松傷衰歌」の尾聯にあたる「不是辭榮好寂寞 還愁稟質抱幽志」の末尾に見える「幽志」は難解な言葉である。『文華秀麗集』諸本は「幽志」ではなく「幽情」となっている。「幽情」の「情」は押韻上の不都合が生じるために、小島氏は押韻の規則に合う『日本詩紀』本文の「幽志」を継承している。しかし数だけで言えば諸本の「幽情」を取るべきであり、「幽志」は『日本詩紀』が創出した推定本文にすぎないとでも言えなくもない。筆者は音韻上の不都合のため「幽情」を直ちに避ける必要はないと思う。嵯峨天皇を中心とする勅撰漢詩集の漢詩には基準として模倣していた唐朝の押韻規則を必ずしも守っておらず、「不都合」や「和習」と言うよりは嵯峨文壇に採用した押韻規則の一特徴を表していよう。一方、「幽志」は『日本詩紀』にしか見えない独立本文であるが故に直ちに推定本文として拒否する必要もないと思う。嵯峨天皇の自筆本などが伝わらない限りでは当時はどう詠まれたかは分からず、「幽情」も「幽志」も本文の候補者として検討する必要がある。

それではまず「幽志」の推定本文を検討しよう。本論の冒頭に掲げた小島訳によると、この「幽志」を〈奥深いところごし〉と理解されているが、この語釈を裏付ける先例や出典は明記していない。『日本詩紀』以外の諸本に見える「幽情」という語彙は『文選』に散見し、その六臣註に「深情」や「憂情」つまり〈深い感情〉や〈憂い悩むところ〉と説明している。あくまでも憶測だが、小島氏はもしかすると「幽志」を「幽情」の同義語と認め、後者に付してある六臣註の「深情」即ち〈奥深い感情〉を少し変えて〈奥深いところごし〉に解したのかも分からない。兎にも角にも、小島氏はどうやら「幽志」をよいもの、望ましいものとして理解している。奥深いところごしはけっして悪いものでも、避けるべきものでもあるまい。

英語圏の研究者は小島氏の解釈を参照しながらもこの「幽志」を反対に、望ましくないもの、あってはならないものとして理解している。Webb は嵯峨天皇の尾聯を次のように英訳する。“It is not that you refuse honors in favor of noble austerity / Rather, you grieve over some hidden intention that your nature has caused you to harbor”<sup>(6)</sup>。Webb 氏の訳によると、詩の語り手である天皇は古松の衰えている様子を傍から観察しながら、その見えぬ原因を推測しようとしている。語り手即ち天皇は古松に向かって話しかけているわけであり、英訳の“you”は古松のことをさす。Webb 氏の訳の大意を和文に直すと次の通りになる。「(御前がこれほどひどく衰えている原因はいったい何なんだろう。) 清貧を望むがため、敢えて栄光を避けているわけでもなからう。むしろ、本性から生まれた密(ひそ)かなる意図に煩わせているのではないか、御前は」。原文の「幽志」を〈密かなる意図〉つまり“hidden intention”と解釈している。なお、この intention はいましばらく「意図」と訳しているが、原文の「幽志」の「志」を強調するためには「志向」や「意志」或いは「ところごし」と訳してもよからう。心に固く閉ざして秘密にしなければならない意図・志向とは、どのようなところごしを意味しているのであろう。Webb 氏は、嵯峨天皇の「代神泉古松傷衰歌」とそれに和(こた)えた仲雄王の「奉和代神泉古松傷衰歌」をいわば「問答詩」と見なし、天皇の詩は実に仲雄王に問いかけているものだと説明している。従って、古松はほかならず仲雄王を暗喩している事になる。天皇は仲雄王の疑わしい顔色や言動を傍(かたわ)らで観察し、詩を以てその見えぬ〈密かなる意図・意志〉を探ろうとしている。仲雄王はこれに対して、天皇の不信感を晴らそうとして、同じく古松に擬えて自分の心の忠実さを主張している。

Rabinovitch & Bradstock 両氏は「還愁稟質抱幽志」を“What worries me is that its inborn nature is to harbor secret desires”と英訳している。ここもまた、詩の語り手を嵯峨天皇と考えているが、古松を“it”と三人称の〈それ・かれ〉にしている。「幽志」を“secret desires”つまり〈漏れてはいけない密かなる欲望〉と訳し、〈僭越〉や〈悪だくみ〉を匂わせる意味を含ませている。仲雄王は「蒙譴外居云々」——職務上の失策により懲戒処分としてしばらく官庁へ行くことを許されず自宅で塾居する——(『文華秀麗集』第30首)と題する詩があり、一時的に失脚していたことを語っているが、詳しいことは全く知られていない。確かに、同じく仲雄王作の「書懷云々」——自分の思いを書きつける——(『同上』第31首)という詩に「辺旅十年」——十年ほど辺地を

(6) Webb, 上掲博論, 第168頁。

旅していた——の文言が見え、Rabinovitch & Bradstock 両氏はこの「辺旅」を〈懲戒処分にあたる左遷〉と理解している。ただし、この「辺旅」の具体的な意味が曖昧なため、ただちにこの説をとる事はできない<sup>(7)</sup>。懲戒処分を受けたとしても、けっしてさほど深刻な処罰ではない。『文華秀麗集』の編纂者の一人のみならず、本集の序文を書くという誇らしい仕事まで命ぜられた以上、嵯峨天皇の重臣であったことは間違えない。天皇に忠実を疑われるほどの失策ではなかった。「幽志」は仲雄王の心情を指しているものだと仮に認めるにしても、この「幽志」は〈ばれてはいけない密かなる欲望〉——例えば天皇の位を奪おうとする悪だくみ——と解釈するのは肯（がえん）ぜられない。

何よりも、嵯峨天皇の「代神泉古松傷衰歌」は仲雄王を念頭に入れながら詠んだものだ、という説を裏付ける証拠はない。天皇のこの詩作に和（こた）えた臣下は仲雄王以外にも多数の人がいたと想像される。ただ『文華秀麗集』を編纂した過程で何故か仲雄王の応制詩（おうせいし）のみが入集されて、他の臣下の応制詩はすべて除外された。そして上述したように、「代神泉古松傷衰歌」の語り手は天皇ではなく古松である。すると、仲雄王の「奉和代神泉古松傷衰歌」の語り手もまた古松である。嵯峨天皇も仲雄王も、そして入集されていない数々の応制詩も、一斉に古松に擬えてその心情を詠んでいる詩群になる。「幽志」は古松そのものの心境を表し、仲雄王本人とは必ずしも関係があるわけでもない。Webb 氏は脚注に次のように述べている。“My feeling is that the poems [by both Saga and Nakao] most likely refer to him [i.e., to Nakao], and not to some other senior courtier who might have been present at the exchange”——「私見によると、[嵯峨天皇および仲雄王の] 詩作は二首とも、詩が交わされた場に参列していた他の老臣たちではなく、仲雄王こそを暗喩している」<sup>(8)</sup>。Webb 説はあくまでも「私見」であり、疑いの余地を残している。なお、Rabinovitch & Bradstock 両氏は Webb 説を踏襲しているのは事実であるが、Webb 氏は何に基づいてこの説を唱えているかは不明である。小島氏は「幽志」をよいものとして理解していて、仲雄王との関係性については一言も述べていない。Webb 氏は小島氏の研究を踏まえながらもそれとは異なった大胆な一説を提供している。しかしながら、筆者はやはり小島氏と同じく、「代神泉古松傷衰歌」における古松と仲雄王との間の関係性はあえて求めなくてもよいと思う。嵯峨天皇のこの詩はむしろ、仲雄王という歴史人物から切り離して解読した方が妥当である。

それでは、天皇は「幽志」は用いてどういう含意を表そうとしているのであろう。さきほど述べたように、「幽志」を「幽情」の同義語と考えられ、『文選』の六臣註では「幽情」を「深情」つまり〈奥深いところ〉或いは「憂情」つまり〈憂い悩むところ〉と解釈している。小島氏は「憂情」を捨てて「深情」をとっている。尾聯の原文は「還愁稟質抱幽志」で、「還（かえ）りて愁（うれ）う、稟質（ひんしつ）は幽志（ゆうし）を抱（いだ）くことを」と読み下している。現代語訳は「反対に松の生れつきが奥深いところざしを持っていることを憂えているのだ」となる。「稟質」は天から稟（うけ）た、生まれつきの個性や本性をいう。嵯峨天皇のこの古松は、自分の本性に「幽志」という特徴が先天的に含まれている事実を愁えている。Webb 氏や Rabinovitch & Bradstock 両氏の英訳によると、「幽志」を愁えている主体は嵯峨天皇であり、この「愁」は〈うれいている〉というよりは〈疑っている〉または〈心配している〉と理解する。前述した理由により筆者はこの説を受け入れず、「幽志」を愁えている主体は松だと解したいところである。古松が自分の本性に「幽志」という特徴が含まれているのを悩ましいほど自覚している。「愁」は〈心配〉や〈疑う〉よりも、「幽志」たる個性によって〈悩ましく思う〉と理解する。

松が自分の本性を自覚し悩ましく思うというのは、いかなる心理であろう。「幽志」が〈奥深いところ〉の意味とすれば、何故それをわざわざ悩ましく思う必要があるだろう。一方、もし「幽志」が〈憂い〉の心情を表しているとすれば、心中の憂いを悩ましく思う心理を納得できても、今度はその憂いの原因を解明しなければならない。いずれにせよ、「幽志」の含意は把握しがたい。『文選』および『全唐詩』に「幽志」の例文は見当たらないが、『全唐文』巻 622 に馬吉甫（ばきつほ Ma Jifu、生没年不詳、698-704 頃在世）の「蟬賦」——蟬に関する賦——の中に次の文が見える。

(7) Rabinovitch & Bradstock, 上掲書, 第 149 頁。

(8) Webb, 上掲博論, 第 171 頁の脚注 84. Rabinovitch & Bradstock, 上掲書, 第 173-174 頁, も同じ意見を記載している。



- 1 伊茲蟲之菲陋  
識君子之行藏 さて、蟬というこの虫は卑しいといえは確かに卑しい虫だ。しかしながら、この蟬こそ徳性ある君子のありかたを心得ているのだ。
- 2 其立志也不慕於鴻鵠  
其守分也不越於榆枋 雲を凌ぐ白鳥は高遠な志向を目指すが、蟬は決してそういった志向を立てない（蟬は僭越なところごしを抱かない）。榆（にれ）や枋（まゆみ）の低木をさえ超えないほど、蟬は自分の低い地位を守る（蟬は卑しい地位で満足する）。
- 3 任朝夕之棲處  
極天地之翱翔 蟬の憩（いこ）うところは朝も夕方も少しも拘らない（敢えて一番よい場所を独占しようとししない）。だから、天地の間に自由自在に飛び回りを存分に味わっている（束縛されない生活を送っている）。
- 4 適其性  
韜其光 本性に叶った生き方を楽しんでいる。その才能や徳性を最後まで隠しているから。
- 5 豈比  
飛燕之巢幕  
流螢之聚囊 蟬は次のものとはどうてい比べられないだろう。燕が民家の帷の上に巢を作る（人が帷を押し払う度に巢が落ちそうなあやういところ）。螢は光を堂々と光らせているために、子供によって袋に入れられてしまう（光を隠すことを知らないもの）。
- 6 至如  
入檻愁猿  
觸籠窮鳥 ましてや次のようなものは蟬と全く違う境遇に遭う。檻（おり）に閉じ込められた猿はひたすら愁（うれ）い、籠（かご）をかぶせられた鳥は窮（くる）しみ悶えている。
- 7 繫透木之幽志  
屈凌雲之遐矯 〔檻に閉じ込められて愁う〕猿が木々を悠々と跳び回るという幽志（ゆうし＝奥深いところごし）は、檻のせいで固く縛られている。（籠に入れられ苦しむ）鳥が雲を高々と凌ぎ超えるという遐矯（かきょう＝高遠な志向）は、籠のため無理に抑えられている。
- 8 豈無故而嬰羅  
諒有求而自擾 猿や鳥がこのような罠などに引っ掛かることは、それなりの理由があるのだ。欲求の火があまりにも燃えすぎて、自らのところを煩わせているに他ならない（自業自得だ）。
- 9 聊息心於萬事  
欣寓跡於一枝 蟬はそれと異なって、よろずの物事をそのまま受け入れ、自分の心をのどかに休めている（現状に甘んじている）。喜んで脱殻（ぬけがら）を適当にそのあたりの木の一枝（ひとえだ）に残す。（未練も執着もない）
- 10 澹然兮自守  
千秋兮若斯 蟬は清らかな心を以て淡々として自分の地位を守る（俗っぽい欲求によって苦難に遭う猿や鳥とは違う）。そのおかげで蟬はいつまでもこのような自由自在な生活を送ることができる。

第二聯にみえる「立志」つまり〈志向や目標を立てる〉および「守分」つまり〈社会における地位を超えようとせず、そのまま静かに守る〉、という二つの言葉がこの賦全体の主眼を表している。猿や鳥はそれぞれ並みならぬ欲求に突き動かされ、本来守るべき地位を妄（みだ）りに超えようとする挙句、檻や籠に入れられ、元来の自由生活まで奪われてしまう。蟬は卑しい存在と言われても、猿や鳥とは反対に、その守るべき地位を静かに守り、高遠なる目標や野望をあえて抱かない。なにごとともそのまま受け入れて、自分の本性にもっとも適した自由自在な日々を淡々と過ごして。蟬は腰が低いからこそ命を全うすることができる。蟬こそ「君子之行藏（こうぞう）」即ち聖人の生き方をよく悟っている。馬吉甫のこの「蟬賦」は蟬を借りて君子ならではの和光同塵という精神を唱える、いわゆる啓蒙的な作品である。

第七聯に肝心な「幽志」がみえる。本聯はやや難解な言葉がいくつも入っている。「幽志」は前述したようにほとんど先例のない語だが、「透木」も「遐矯」もまた珍しい表現である。「透木」の「透」は、『説文解字』

によると「跳」の異体字に等しく、ここでは猿が木々の間に跳び回ることを指すのであろう。「遐矯」は〈遐（とお）く矯（あ）げる〉という意味で、今の「高遠」と同義語である。馬吉甫はどうやらこの第七聯において珍しい語彙を集中的に盛り込むことに力を入れているようである。なお、ここに使われている「幽志」は木々を自由自在に跳び回る、猿の心境を言っている。その対語（ついで）となる「遐矯」は雲を凌ぎ超えて自由自在に飛び回る、鳥の心境を言う。文脈に際して考えると、猿の「幽志」の「幽」は人里から遠く離れているこんもりとした森を連想させる字である。『文選』や『全唐詩』に散見する「幽林」、「幽澗」、「幽谷」——人気（ひとけ）のない深い森や川や谷——というまるで仙境のような別世界を思い浮かばせる語である。そのような深い森などで、人間に邪魔されず悠々と跳びまわるのが猿の本性であり、先天的な〈こころざし〉でもある。自業自得かどうかはさておき、猿は人間に捕まえられてはもう深い森で自由自在に跳びまわることにはできず、「幽志」はそれによって奪われるわけである。

このように考えてくると、「幽志」は俗世間から遠く離れた、自分の本性にもっとも適した自由な生活のできる異境を匂わせる言葉であることが分かる。第六聯に見えるように、猿はその「幽志」を奪われることによって愁え悲しむ。嵯峨天皇の古松もまた「稟質」（ひんしつ＝本性）に「幽志」を抱いているところによって「愁」（うれ）えている。古松の場合は猿と同様に、人跡のない幽林に生まれながら、人間にとらわれ本性に合わない場所に置かれている。猿は檻に入れられているのに対して、古松は神泉苑に移植されている。確かに、神泉苑は檻とは言い難い。しかしながら、猿と同じく「幽志」を抱くこの古松にとっては、神泉苑である「上林」はけっして幽林ではない。いくら上林と言っても、そこに移植された古松の故郷とは根本的に異なっている。いくら天皇の恩顧に恵まれていても、人影のない仙境とは程遠い境地である。古松が「顛顛」（しょうすい）している理由は猿と同じく、自分の故郷である幽林や幽谷を恋しく思っているからであろう。

ここで改めて「凡木」の意味を考えたい。嵯峨天皇は「澗底松」——谷川の底に立つ松——（『文華秀麗集』第123首）と題する詩があり、人影のない深い谷を流れる川辺に立つ古松の心情を詠んでいる。その尾聯が次の通りである。「本自不堪登嶺上 唯餘風入韻宮商」。紙幅の制限によりここで詳しく論ずることはできないが、尾聯の大意を筆者なりの解釈を反映させた現代語訳を示すと次の通りになる。「谷間に生まれた松である某（それがし）は、自分の本性に従ってもとより山に登ろうとはあえてしない。むしろこの深い谷間に残ったまま、ただただ清らかな風を受けながら天籟（てんらい＝自然界の音楽）を奏でるのがまことの楽しみだ」。ここに見える「不堪」——〈何々をするに堪（た）えず〉——は「不敢」——〈何々をあえてしない〉——と理解した方がよからう。松があえて高山に登ろうとしない理由は、やはり自分の本性に適した谷暮らしを静かに味わいたいからである。同じ詩の首聯に松の住処を「幽澗」（ゆうかん）つまり深い谷を流れる河として描写している。「登嶺」はおそらく〈高位に昇る〉ことを、「幽澗」は逆に〈低位を守る〉ことを、〈野望のある高遠な志向〉と〈静かで自由自在な生活〉をそれぞれ暗喩している。自分の本性を大切にすることの松はもちろん後者を選ぶ。「澗底松」の松も「代神泉古松傷衰歌」の松も、人間の足音がほとんど聞かれない幽（ゆう）なる谷や林を懐かしく思っている。山に登れば、確かに高位高禄は手に入るが、それに纏（まと）わる嫉妬や讒言（ざんげん）もある。山の上に煩わしい娑婆が待ち構えている。深い谷が遁世者の隠居する異境を表しているのに対して、山上は宮廷を中心とする賑やかな娑婆世界を表している。

「代神泉古松傷衰歌」の古松は「昔從凡木殖上林」つまり「昔、平凡な木々に連れて神泉苑に移植された」と語っている。すでに述べたように、この「從」は〈より〉ではなく、〈したがう〉或いは〈一緒に〉や〈つれて〉と理解されたい。それでは、幽谷もしくは幽林から上林（神泉苑）へと移植された松は当初、独りで移植されたのではなく、他の木々と一緒に移植された。松と一緒に移植された木々を「凡木」と呼んでいる。「上林」つまり神泉苑は「澗底松」に見える「嶺上」即ち宮廷を指していて、「凡木」は宮廷を雑踏する高官たちを暗喩している。昔、幽谷に隠居していた頃の松は「本森沉」——もとはこんもりと茂っていた——が、宮廷の上林に移植され、「凡木」つまり高官に囲まれるようになっては「今顛顛」——今は色がひどく褪せていて疲れ果てている。古松は自分の本性に適した隠居時代の清閑（せいかん）な生活を思い出し、その異境への恋慕——「幽志」——のために憂い悩み、顔色までがひどく褪せている。できれば「凡木」の間からはやく退き、誰もいない深い山に戻りたい、という奥深いこころざしである。

## 五、唐詩に見える「幽情」の境地

嵯峨天皇主催の三つの勅撰漢詩集を調べるかぎり、「幽」から始まる言葉は「幽深」、「幽人」、「幽情」、「幽趣」などと少なくない。しかも、これらの言葉は例外なく望ましい心境を表している。小島氏の言う〈奥深いところ〉はまさに的を射た解釈である。けっして Webb 氏や Rabinovitch & Bradstock 両氏の説くように、〈僭越な悪巧み〉や〈密かなる欲望〉など、あつてはならない心情を指すものではない。「幽志」を「幽情」——『文選』の六臣註でいう「深情」つまり〈奥深いところ〉——の同義語と認めることは差し支えなかろう。唐朝の吳筠（ごいん Wu Yun ?-778）は道教に明るい詩人であった。「遊廬山五老峰」——廬山（ろぞん）にある五老峰（ごろうほう）というところに遊ぶ（『全唐詩』24: 853）——に次の二聯がある。

- |   |                |   |
|---|----------------|---|
| 1 | 雲外聽猿鳥<br>煙中見杉松 | 雲の果てのどこかで猿や鳥の鳴き声が聞こえる。靄の中に杉や松の木の輪郭がぼんやりと見える。  |
| 2 | 自然符幽情<br>瀟灑愜所從 | このような自然景色は僕の「幽情」（奥深いところ）にぴったり合うのだ。この山で瀟灑（しょうしゃ＝あっさり、自由自在）にしている、僕が実現しようとする生き方にちょうど愜（かな）っている。 |

第一聯で五老峰という幽遠な異境を描写しているところに、猿や鳥の鳴き声が遠く聞こえ、杉や松が靄の中に幽（かす）かに見える。吳筠は景色を眺めながら、なるほど、その幽（ゆう）なるところはまさに自分の本性に含まれている「幽情」に合致している、とあらためて感心する。このような風景を「瀟灑」（しょうしゃ）つまり〈何にも束縛されずあっさりしている、自由自在なさま〉と形容している。嵯峨天皇の「代神泉古松傷衰歌」に登場する古松の本性に含まれている「幽志」即ち「幽情」とは、吳筠の「遊廬山五老峰」に描かれている五老峰の「瀟灑」なる異境への憧（あこが）れとは一致している。吳筠の「符幽情」——某（それがし）の奥深い心にぴったり合う——および「愜所從」——某が送ろうとしている生き方に適（かな）っている——の主語を嵯峨天皇の古松に置き換えても問題ないほど、その幽遠な心境は吳筠と嵯峨天皇との間を通じている。従って、「幽志」を〈瀟灑なる幽境（ゆうきょう）へのあこがれ〉と理解してもよからう。

吳筠の半世紀ほど前に、女官の上官婉兒（じょうかんえんじ Shangguan Waner＝上官昭容 じょうかんしょうよう Shangguan Shaorong, 664-710）は「遊長寧公主流杯池二十五首」——長寧（ちょうねい Changning 生没年未詳）というお姫様の御屋敷にある流杯池（りゅうはいち）に遊ぶ詩二十五首——（『全唐詩』1: 5）を書き、そのうちの第 14 首にあたる詩に次の二聯が見える。

- |   |                |  |
|---|----------------|--|
| 1 | 攀藤招逸客<br>偃桂協幽情 | あたりの老木を攀（よ）じ登る藤は、俗世間に捕らわれない優雅な旅人を招くように、美しく棚引いている。<br>金木犀（きんもくせい）の香りを放つ偃（かたよ）っている桂樹もまた、高客の「幽情」によく協（かな）っている。 |
| 2 | 水中看樹影<br>風裏聽松聲 | 我々は池に移る藤や木々の影を眺めながら、<br>松の枝をさやさやと吹き鳴らす風の音を傾聴する。  |

吳筠の「遊廬山五老峰」の「符幽情」と同じく、ここも「協幽情」といい、「符」・「協」は両方とも〈かなう〉或いは〈ぴったり合う〉と訳せる。本論で詳しく検討する余裕はないが、嵯峨天皇の詩作における上官婉兒の影響は多少とも認められる。御詠の「和内史貞主秋月歌」——内史の滋野貞主（しげののさだぬし 785-852）が詠んだ『秋の月の歌』に和（こた）えた詩——（『文華秀麗集』第 137 首）の第七聯に「洞庭葉落秋已晚」という句がある。「洞庭湖（どうていこ Dongting Lake）の水辺に立っている木々の葉っぱはすっかり落ち、

もう晩秋の季節だ。『楚辞』の「九歌」の一首である「湘夫人」(しょうふじん)に「嫋嫋兮秋風 洞庭波兮木葉下」——そよそよと秋風がふけば、木々の葉っぱが落ちて、洞庭湖の漣(さざなみ)に漂っている——という文言が見え、冷たい秋風が吹くと洞庭の木々の葉っぱは落ちる、とこの詠みぶりのもっとも古い例であろう。嵯峨天皇当時の文人たちは『楚辞』を通読していた。「和內史貞主秋月歌」では、從軍して遠い国境に奉仕している良人(おっと)を切に思う婦人の立場から詠んだもので、「湘夫人」の文言を念頭に入れたとしても、「湘夫人」全体の内容とはさほど合致しない。

上官婉兒の「綵書怨」——彩りの文字で書いた(おっとへの)手紙にて心中の怨みを発す——(『全唐詩』1:5)に「葉下洞庭初 思君萬里餘」——洞庭湖の水辺に木(こ)の葉が落ち始めている(秋が来た)。都から万里も離れている我が良人(おっと)を寂しく思うこの心は彼(かれ)の方へ通っている——という聯が見える。嵯峨天皇の「和內史貞主秋月歌」の主人である婦人の心情に合致している。『楚辞』の「湘夫人」よりは、上官婉兒の「綵書怨」を取り入れている可能性がある。

上官婉兒の「遊長寧公主流杯池二十五首」の第14首を直接に受容しているかどうかはいまだ分からないが、そのなかに見える「幽情」という発想は嵯峨天皇の「幽志」に共通している<sup>(9)</sup>。吳筠も上官婉兒も、「幽情」の境地を具体的に表現する際には松が必ず登場する。嵯峨天皇の「代神泉古松傷衰歌」の松が「幽志」を抱くのも、唐朝のこのような系譜を受け継いでいる。神泉苑の古松は「幽志」つまり出身地の〈瀟灑なる幽境へのあこがれ〉のあまり、ひどく「顛顛・憔悴」(しょうすい)している。天皇からの日々のご恩顧を感謝しながらも、華やかな上林が自分の本性に適していないことは変わらず、結局は自然と衰えてゆく。自らの「幽志」を「愁う」とはこういった心理である。

## 六、結び——「幽懷」の意味について

嵯峨天皇の「代神泉古松傷衰歌」に和(こた)えた——或いは倣(なら)った、合わせた——仲雄王の「奉和代神泉古松傷衰歌」のことは本論の冒頭あたりに触れた。その尾聯は次の通りである。「自然色衰無他故 不敢幽懷負恩顧」——自然(じねん)に色の衰(おとろ)うるは他(あだし)故(ゆえ)無し 敢えて幽懷(ゆうかい) 恩顧(おんこ)に負(そ)むかじ(訓読は小島氏に拠りながら現代仮名遣いに改めた)。小島氏の頭注に含まれている現代語訳では、「自然に松の翠色が衰えあせるのは他に理由があるわけではない、松の奥深い心が天子の御恩に敢えてそむくまいとするだけだ」となっている。恩顧に〈そむかない〉とはいったい何を意味するのであろう。我々読者は、古松が天皇の〈恩顧にそむく〉という文言を聞くと具体的にどのような行動を想像すべきかは、見当がつかない。Webb氏はこの尾聯を“Color fades naturally; there is no other reason / One dare not harbor secrets, and betray royal favor”と訳している<sup>(10)</sup>。つまり「松の色は自然に褪せるものだよ。これ以外に別の理由は何もない。敢えて皇室の恩恵を背(そむ)くような内密を抱くことはない」。それに倣って、Rabinovitch & Bradstock 両氏は“The pine tree’s beauty has declined *naturally*—there is no other reason. / It would never dare harbor secret desires or betray His kind concern”という英訳を施す<sup>(11)</sup>。つまり「松の美しさが崩れているのは自然な成行きだ。他の理由はあるまい。その木は密かなる欲望を抱いたり天皇の優しいお気遣いを背いたりする(ような行為)は敢えてしない。」

これらの英訳で分かるように、「幽志」と同じく「幽懷」(ゆうかい)もまた secrets 或いは secret desires つまり〈秘密〉や〈密かなる欲望〉と理解している。小島氏は「幽懷」を「幽志」と同様に〈奥深いところ〉即ちよいもの・ほめるべきものと解しているのに対して、Webb氏およびRabinovitch & Bradstock両氏はこれを〈内密〉即ちわるいもの・あってはならないものと解している。前述したように、嵯峨天皇の勅撰漢詩集に散見する「幽」を含む漢語は例外なく望ましいものを指している。「幽志」もそうであれば、「幽懷」もそうでな

(9) 甄周亜の「中日宮廷女詩人上官婉兒与額田王詩歌創作比較研究」(『現代語文』2013:7)の第70-71頁に、上官婉兒の「遊長寧公主流杯池二十五首」の第14首と、『万葉集』の女流歌人である額田王との間の作風の比較を試みている。

(10) Webb, 前掲博論, 第171頁。Webbは“Color fades naturally, there is no other reason”と書いてあるが、筆者はこれを“Color fades naturally; there is no other reason”とnaturallyの後のコンマをセミコロンに変えた。

(11) Rabinovitch & Bradstock, 前掲書, 第141頁。斜体字とHisの大文字は作者のまま。

なければならない。しかも唐詩における「幽志」およびその同義語にあたる「幽情」の例を照らし合わせた結果、それぞれの語彙は〈幽境へのあこがれ〉や〈自由自在な奥深い心境〉の含意を有することが分かった。最後に、唐詩における「幽懷」の例を検討し、その語彙の意義を考えたい。

王勃（おうぼつ Wang Bo 649-676）は「別盧主簿序」——友人であった主簿（しゅぼ）の盧氏と饞別する酒宴で披露した各々の詩作の序（『全唐文』巻181）——に「盍陳雅志 各叙幽懷」つまり「それでは我々はこの酒宴において心底（しんてい）の思いを素直に陳（の）べよう。それぞれの胸中（きょうちゅう）の幽懷を詩の形で表そうよ」という文言が見える。「雅志」は「素志」や「本懷」つまり普段から抱いている志向や思いを指す。「雅志」の対語となっている「幽懷」は、友人との別れを寂しく思う、苦しくてもほのかに甘い味わいのある心境を言う。そして、李觀（りかん Li Guan 766-794）は「授衣賦」（『全唐文』巻532）において、人生の常ならぬことを陳べる件に「觸物易悲 幽懷難狀」——この世間に生きているかぎり、物事に触れる度に悲しくなることはしょっちゅうある（ので、わりと表現しやすい）。逆に、心底の幽懷が（あまりにも深くて、）表現しきれないものだ——と感嘆する。ここに見える「幽懷」は無常な人間界を通観する〈奥深いところ〉を表していて、まさに嵯峨天皇の「幽志」と同じである。

韓愈（かんゆ Han Yu 768-824）は「幽懷」（『全唐詩』10:337）という詩を残した。そこに「幽懷不能寫 行此春江潯」——心に籠っている幽懷（奥深い思いや気持ち）はうまく発散できない（ので、）春の川辺を散歩する（しかない）——という一聯が見える。この「幽懷」はいったいどのような気持ちを指しているのであろう。詩の後半に「但悲時易失 四序迭相侵」——光陰がすみやかに過ぎてしまうことを悲しむばかり。四季も互いに攻め合っているように次々と去っていく——と世間の無常を客観的に考えながら静かに嘆いている。従って、「幽懷」とは、ぐるぐると変わる世間を観察しながら、無常の底に隠されている不変な何かをあこがれている心である。要するに、俗世間から離れたい、俗世間に捕らわれず静かに生活したい、という心でもある。

上の例以外にも「幽懷」を含む唐詩はあるが、ここで敢えて挙げない。管見によると、唐詩の世界では、「幽懷」は「幽志」とほぼ同じく、〈俗世間から離れた自由自在な幽境にあこがれる〉奥深い心を指す。「奉和代神泉古松傷衰歌」の「不敢幽懷負恩顧」に改めて読んでみると、次の訳はあり得るのであろう。「古松である某は幽境をあこがれているに違いないが、それにしても一方、この奥深いところは敢えて天皇の恩恵を台無しにするつもりもない」。姿が衰えるほど古松は出身地の幽林を懐かしく思い、できればはやく帰りたいという気持ちがつのが、やはり天皇の御恵みを完全に無視して勝手に上林を離れることはできない。これこそ嵯峨天皇の古松の心ではなからうか。



**【付記】** 嵯峨天皇が「代神泉古松傷衰歌」を以て具体的にいかなる気持ちを文壇の詩人（臣下）たちに伝えようとしたかについては、天皇の他の詩作を視野に入れながら言論する必要がある。紙幅の制限により本論では詩中の語り手である古松のころを探ったとは言え、Webb氏やRabinovitch & Bradstock両氏のように嵯峨天皇本人の心情を考察されていなく今後の課題にする。